僕の頭の中の銀閣寺

大爆笑ダラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の頭の中の銀閣寺

【Ｎコード】

Ｎ５３３４Ｉ

【作者名】

大爆笑ダラー

【あらすじ】

友達からセックスがどういうものかを知り「大人たちがみんなそんな変なことをしてるなんて！大人に騙されてた！」と感じて以来、大人を信用することできなくなった少年が同級生の女の子を助ける話

1（前書き）

前に間違えて短編でうｐしたやつをきちんと連載にして再うｐ

1

誰だっけ。忘れた。
誰かは忘れたけど、いつかははっきりと覚えてる。小学校六年生の時、学校のトイレで小便してたら隣りで小便してた誰かに「なあなあ、セックスって知ってるかー？」と聞かれた。

僕はその時まだセックスがどういう行為かを知らなかったので「セックス？なにそれ？」と聞き返したら「セックス知らないのかよ。いいか、セックスっていうのはさ～」とセックスについての説明を友達から受けた。

小便が終わったあとも友達の熱心な説明は続き、その日僕は初めてセックスというものの存在を知った。

衝撃だった。

何度も友達に「本当なのそれ？嘘ついてない？」と聞き返した。それだけ『セックス』というものの内容が衝撃的だったのだ。

だって友達によればセックスっていうのはチンコが女性の股に開いてる穴に入るということだけど、その姿を頭で想像してみるとすごくまぬけでありえなくて、でも今までにこっそりと見たエロ本を思い返してみるとたしかにその『セックス』らしき行為は行われていてたので、どうやら友達の話は本当らしかった。

セックスを知った衝撃は文字通り世界が変わるほどだった。

だってもしそのセックスっていう行為によって子供ができるんだ

ったら、子供を持ってる人はみんな最低一度はセックスをしてるっつうことで、それはつまりいつも優しい僕のおばあちゃんとおじいちゃんもセックスしたことがあるし、仲の悪い僕の両親だってセックスしたことがあるし、怒るとすごく怖いけど普段は優しい担任の中村先生だってセックスをしたことがあって、ってオイオイオイオイ。

その衝撃の事実を知って僕は大人全員に騙されたと思った。
みんな偉そうでなんでも知ってるような顔しながら、僕の知らないところではそんなよくわからない変なことをしている、しかもほとんどの人間が。
なんだそりゃ！

その時僕は同時にこうも思った。
友達からセックスのことを聞いたおかげで、大人がセックスっていうよくわからないことをしていることを僕はたまたま知ったけど、きっとこれは大人が子供に隠していることの氷山の一角でしかなく、大人っていうのはまだまだいろんなことを隠しているんだと。

だから大人は信用しちゃいけない、大人は僕らに手の内を全て見せていないと思ったのが小学校高学年の時で、それから僕は心の底から大人を信頼することがなくなった。

もちろん好きな大人はたくさんいて、例えば仲の悪い両親は二人セットだと嫌いだけどひとりなら好きだし、おばあちゃんやおじいちゃんはいつも笑顔で優しくて好きだし、担任の中村先生は怒った時は怖いけどいつも正しいから好きだ。
でもそんな彼らももしかしたら僕には隠している一面を持っているかもしれないと思ったとん、僕は大人との間にとてつもない距離を感じた。

セックスの真相を知ってから数年が経ち、僕は中学三年になった。

中学生になったくらいから僕はエロいものにどうしようもなく惹かれるようになり、エロの魅力に惹かれるにつれて大人達がセックスをしているという嫌悪感に似た感情は、エロの持つ強力な魅力によってたちまちに消えた。

しかしその嫌悪感のようなものが消えたあとでも、大人達は手の内を全てこちらに見せてないという気持ちは、僕の体にまるで呪いのように取り憑いたままだった。

でも中学三年になって、そろそろ心の底から大人を信用してみてもいいのかもしれないと思ったところに舞ちゃんと出会い、僕はより一層大人は信用しちゃいけないと思った。

2

舞浜さんと話すようになったきっかけは家からは電車一駅分くらい離れた公園でだった。

塾からの帰りに通りかかったその公園で、舞浜さんは制服姿のままブランコに乗っていた。

夜中の公園でブランコに乗っている舞浜ちゃんの姿は異様で、僕は舞浜さんの姿をジッと見つめていた。

中学三年になって公園でブランコ乗ってるだけでもおかしいのに、夜中にひとりでブランコに乗っているなんてもっとおかしかったし、何よりおかしかったのは電灯に照らされる舞浜さんの顔が無表情だったことだった。

僕が見てると舞浜ちゃんはブランコをしばらく乗ったあと、今度はすべり台を何度もすべった。すべってはまた登り、すべってはまた登り機械のように淡々と何度もすべり台をすべる舞浜さんから僕は目を離せずジッと見てたら舞浜さんがこちらに気づいた。

舞浜さんとは中学一年の時だけ同じクラスでその時ちょこっと話したことはあるけど、中学二年からはクラスがいっしょになったこともないので話したこともないし、しかもなんだか見てはいけない光景を声もかけずに盗み見てしまったことが後ろめたいしで、気まずいと思ったけどそれはどうやら相手も同じみたいで、さっきまで無表情な顔つきだった舞浜さんは恥ずかしそうな顔をしていた。

「舞浜さんだよね。こんなところで何してるの？」

気まずい雰囲気の中、僕が舞浜さんに話しかけると「遊んで」と

舞浜さん。

「遊んでたってこんな時間に？」

「うん、私公園で遊ぶの好きなんだ。城田君は塾の帰り？」

公園で遊ぶのが好きだとしても、何もこんな夜遅くに遊ぶってどうなのと思ったけど、それは言わなかった。

「そうだよ」

「そうなんだ。塾大変？」

「大変っていうかめんどくさいな」

「まぁ今が頑張りどころだからね」

「そういや舞浜さんはどこの高校行くの？」

「わたしは推薦でもう高校決まってるんだ」

そう言い舞浜さんは有名な公立高校の名前を口にした。

「すごいね」

「そんなことないよ」

それから話題が尽きて再び沈黙。何か話そうと思うんだけど、何も話すことが思いつかなく、一生懸命に何か話そうとしてたら「それじゃあ私帰るね」と舞浜さんは公園を出て帰って行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5334i/

僕の頭の中の銀閣寺

2010年10月21日00時53分発行